2009年度 地理学野外調査実習 報告書

# 伊勢 河崎

大阪市立大学文学部 地理学教室

## ＜目　次＞

はしがき (2)

Ⅰ 伊勢河崎の業種転換

阪口 巧也・若井 裕 (4)

Ⅱ 勢田川と世古の移り変わり

本多 あずさ・和田 崇宏 (14)

Ⅲ 本河崎と向河崎

出水 束・山本 達也 (21)

Ⅳ 観光まちづくり～河崎と神社の比較～

坂中　里名・山田　耕 (27)

Ⅴ 河崎の特産物

石貫 裕子・杉本 順也・西岡 美樹 (33)

編集後記 (42)

## はしがき－「住みごたえのある町」河崎の持続的発展を目指して－

本書は、大阪市立大学文学部地理学教室が提供する選択必修科目の一つである「地理学野外調査実習Ⅰ」（前期開講）、「地理学野外調査実習Ⅱ」（後期開講）において、2009 年度に実施された伊勢市河崎地区の実習調査報告である。

この「地理学野外調査実習」の趣旨は、現地調査の企画・実施、調査結果のとりまとめという一連の過程を通じて、地理学の研究にとって必要不可欠な手法を修得することにある。本年度の受講者は、2009 年 4 月に地理学コースに進学したばかりの 2 回生 11 名で、この授業を通じて本格的なフィールドワークを初めて経験することとなった。

4 月に河崎に関する DVD や地形図を題材にして調査地の概要を知るところから始まり、２名ずつ３班に分かれてテーマの決定と調査項目の選定、班別に詳細な調査スケジュールの作成を行い、8 月 8 ～ 10 日には河崎に赴き現地調査を行った。その後、10 月より調査結果の整理にとりかかり、12 月の研究成果の中間発表を経て、2 月中旬には最終レポートを提出することとなった。こうした一連のプロセスは、受講生に少なからぬ努力を要求するものであり、レポートの締切り直前には、学年末の定期試験の合間を縫って、研究室で長時間にわたって作業を行ったグループもあった。学術的にはまだまだ未熟な部分が散見されるレポートではあるが、授業担当者による原稿の修正は必要最小限にとどめた。自分たちが調査した内容を第三者に理解してもらえる形態でとりまとめた受講生の努力を、是非感じ取っていただきたいと思う。

さて、2007 年度にスタートした河崎での実習調査も今年で３回目を迎えた。今回の調査には、「業種構成の変化」や「まちづくり」、「伊勢春慶」など、これまでにも取り上げられたテーマが含まれている。現地調査の準備から報告書の作成に至る過程で、受講生には様々な資料の収集と整理が求められるが、その過程を通じて、彼らは河崎の地域資源に対する共通理解を深めながら、新たな知見を見いだして行く。したがって、調査内容については、過去の報告書からヒントを得たり、昨年までの成果を踏まえつつ、それらをさらに掘り下げたものであって、各章には受講生の思いが込められている。

具体的には、第Ⅰ章では交通手段の変遷とともに移りかわっていった伊勢の商業機能を河崎マーケットなどを事例に明らかにした。第Ⅱ章では、「世古」と呼ばれる路地の変化に焦点を当てて、河崎における人々の生活の変化を描き出している。また、「本河崎」（勢田川左岸）と「向河崎」（同右岸）との関係性の変化が住民意識に及ぼした影響が取り上げられたり（第Ⅲ章）、河崎のまちづくり

を隣接する神社(かみやしろ)地区での取組みと比較したり(第Ⅳ章)、さらには伊勢春慶の復興や S サイダーの復刻事業を対象に、近年の地元での新たな動きをトレースしたグループもあった(第Ⅴ章)。

この間に担当者は、日独両国の研究者・実務家たちとともに、「『住みごたえのある町』をつくるー大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメントー」(平成 21 年度・大阪市立大学都市問題研究事業採択プロジェクト)と題する共同研究プロジェクトをスタートさせた。事例として取り上げた大阪・ハンブルク両市の比較から明らかになってきたのは、国際的な都市間競争が大型の開発プロジェクトの誘致・導入レースを激化させる中で、都市内部の格差はむしろ増大しつつあり、それゆえにこそ様々な担い手による地区レベルでの地に足を着けた取組みが重要になってきている点である。また、20 世紀における急速かつ大規模な都市成長が作り上げた市街地は、それが計画的なものであればなおのこと、安全・安心ではあっても界隈性に乏しく、面白みのないものとなっている。

これに対して、伊勢・河崎は第二次大戦後における高度成長の大波に飲み込まれたように見られながらも、幸いなことにこれまでの歴史が地域資源として町内のいたるところに重層的に刻印されている。たとえクルマ全盛の時代には不便さをともなうものであっても、こうした地域資源を世代を越えて活用しつづけていくことが、実は「住みごたえのある町」河崎の持続的な発展につながっていくことであろう。

今回の調査に際しても、現地見学やインタビューなどを通じて地元河崎はもとより、伊勢市内の多くの方々にお世話になった。とりわけ、インタビュー日程の調整をはじめとして、私たちを快く受け入れ、多大なご協力をいただいた NPO 法人・伊勢河崎まちづくり衆の高橋徹理事長、伊勢河崎商人館の西城利夫さん、西山清美さんには心より御礼申し上げたい。

河崎を愛する人々にとって、この報告書が多少なりとも役に立つことがあれば、実習参加者一同にとって望外の喜びである。

2010 年 3 月

「地理学野外調査実習」授業担当者
大阪市立大学大学院 文学研究科 地理学教室
教授　大場 茂明

# Ⅰ．伊勢河崎の業種転換

阪口 巧也・若井 裕

１．はじめに
２．河崎の商業の変遷
　1）過去の業種とその変化
　2）業種変化の要因
　3）現状と今後
３．河崎とその周辺の商店街の変遷
　1）はじめに
　2）各商店街の位置関係
　3）河崎マーケット
　　(a）歴史
　　(b）過去の業種
　　(c）特徴・形態
　　(d）全盛期の様子および客層
　　(e）衰退時期とその要因
　　(f）現状および今後の見通し
　4）めいりん村・しんみち商店街
　　(a）歴史
　　(b）特徴および全盛期の様子
　　(c）衰退時期とその要因
　　(d）現状
　5）まとめ
４．蔵の転用
　1）蔵の保存運動の起こり
　2）蔵バンクとは
　3）蔵の転用の課題
　4）まとめ
５．まとめ

## １．はじめに

河崎は、古くから勢田川の水運を利用した問屋街として発展した町である。かつては米や海産物などの物資の集散地としての役割を果たしており、「伊勢の台所」と呼ばれるほど活気があった。しかし、時代の流れで輸送手段の主役が鉄道や車などの陸上交通へと移り変わっていくにつれて、河崎の水運は次第に廃れていった。同時に河崎の町も物資の集散地としての役割を失い、問屋街としての機能も薄れていった。しかし近年、河崎の昔ながらの街並

みを観光資源として活用し、町の活性化を図ろうとする動きが出てくるなど、河崎における業種の性質は大きく変化している。

そこで本稿では、蔵や商店街などに具体的にスポットを当て、河崎の業種変化について分析を行い、それを通して河崎の町の特徴や今後の河崎の在り方について考察していこうと思う。分析にあたっては、現地でのインタビューから得られた情報を主に参考にさせていただいた。私たちの拙いインタビューに応じてくださった皆さんに、この場を借りて感謝の意を表明したい。

## ２．河崎の商業の変遷

### 1)　過去の業種とその変化

河崎は勢田川による舟運を中心として、問屋業が栄えた街であるが、河崎には問屋業以外にも小売や製造業なども立地していた。また、一口に問屋業や小売などといっても、取り扱う品によってその業種は分けられるが、河崎は様々な品物を扱っていた。特に、河崎では米問屋や酒問屋、荒物雑貨などを取り扱う問屋が多かった。

これらの業種はみな海と勢田川を通じて行き交う舟によって支えられてきており、そのため勢田川の存在はなくてはならなかった。

しかし、河崎の商業は昭和 40 年ごろを境に徐々に衰退していく。この頃から店が減少し始め、昭和 50 年ごろまでには主だった問屋は河崎から郊外の広い土地を求めて流出してしまった。また、小売業はほとんど壊滅状態にまで陥ってしまう。この要因として、次のようなものが挙げられるだろう。

### 2)　業種変化の要因

第一に、大型小売店が増加したことである。河崎のような町では通常魚屋や八百屋など取り扱う品物が限定された小さな個人商店が多い。これは毎日店に通うという主婦の生活習慣があったからである。しかし、冷蔵庫の登場により「買い溜め」が可能になると、より多くの品物を一度に買う傾向が見られるようになり、そのニーズに合わせて小売店は大型化した。そして、その時代に取り残される個人商店の経営は苦しくなり、河崎の商業は立ち行かなくなってしまった。

第二に、道が細く不便なことである。勢田川沿いに栄えた河崎では、陸上交通よりも水上交通が優先されており、広い道でなくてもよかった。しかし、モータリゼーションの拡大、さらに、車の大型化（商品を運搬するトラックなど）により、道の細い河崎には車が進入しづらい。客はもちろん、仕入れのトラックも河崎には入りにくいため、河崎の集客力が低下した上に、仕入れも難しくなったと思われる。

第三に、問屋業の再編が挙げられる。現代に見られるディスカウントショップや直売所などは問屋業を介さない商業形態で、消費者からすれば商品の値段が安いため、購買意欲が湧くが、問屋から見ればその分仕事がなくなることを意味する。また、企業の大型化など、小さな問屋では経営が厳しくなり、問屋をやめてしまうということもある。

第四に、河川改修による立ち退きも要因の一つであろう。七夕水害による勢田川の改修工事で立ち退きしなければならない家が出てきた。河崎は前述の通り、勢田川に沿った商業の

街であったため、当然立ち退きしなければならない家というのも商業を行っている、あるいはかつて行っていた家や蔵が多い。この河川改修を機に、河崎から離れていった人も多いと思われる。

最後に、後継者不足も河崎の衰退に関わっている。上で見てきたように、河崎の商業を取り巻く環境は厳しい状況にある。このような状況で、店の跡を継ぐよりは外に働きに出かけたほうがよほどいいと考え、あるいは河崎の商業に将来性を感じない子供たちが家を継がないケースが出てきている。跡継ぎがいなければ、遅かれ早かれその店は廃業してしまい、河崎の商業はより衰退してしまうという悪循環に陥ってしまうこととなる。

3)　現状と今後

上で見たように、河崎の商業の前途は明るくはない。しかしながら、一方で新しい業種も出つつある。例えば、喫茶店や蕎麦屋、個人医院などが河崎で開業している。けれども、これは特殊なケースであり、河崎全体の商業を考えると、これからもやはり衰退していくのではないだろうか、と「河崎げんき会」の中には言う人もいる。また、河崎には車で入りづらいため、駐車場があればまだ何とかなるのではないか、と述べる人もいるが、自動車の進入の難しさだけが河崎の衰退に関係しているわけではないので、かなり駐車場が増えたとしても、河崎の商業の現状は変わらないのではないだろうかと思われる。

一方で、河崎を商業の街としてみるのではなく、あくまで「河崎」という街として考えるのであれば、住宅地として発展する余地はありそうである。伊勢市駅にも徒歩でいける距離であり、近くにはスーパーマーケットなどもあり、生活には不便ではない。現在、河崎はあくまで「商業の街」を貫くのか、あるいは別の街づくりを模索するのかを決める時が来ているのかも知れない。

## ３．河崎とその周辺の商店街の変遷

1)　はじめに

前節で河崎全体の業種変化について述べたが、本節では業種変化の具体例として河崎マーケットを取り上げる。ここでは、河崎マーケットの過去と現在を比較した上で、どのような変化が見られるか、またその変化の要因はなにか、といったことについて検討する。さらに、同じ伊勢市内にある「めいりん村」および「しんみち商店街」の二つの商店街と河崎マーケットを比較することで、それぞれの地区によって何か違いが見られるかについても考えていこうと思う。

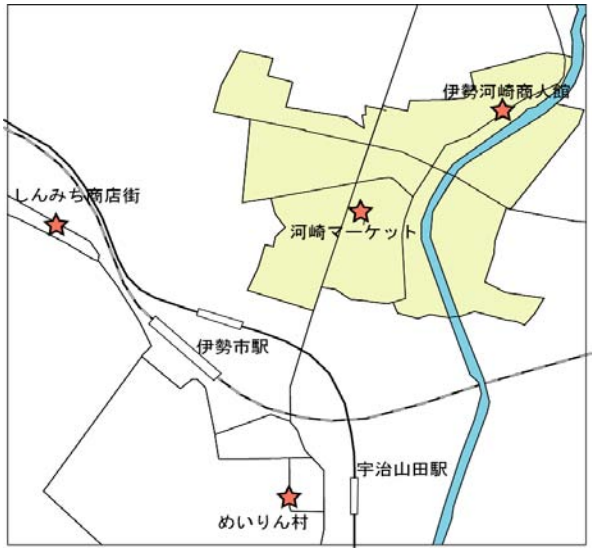



図１　伊勢市の主要な商店街と河崎マーケットの位置関係　→

2)　各商店街の位置関係

各商店街の位置は、図 1 の通りである。河崎マーケットは八間道路に面したところに、めいりん村は宇治山田駅前に、しんみち商店街は伊勢市駅の西側に、それぞれ立地しているのがお分かりいただけるかと思う。

3)　河崎マーケット

河崎マーケットの調査結果は主に、婦人会の方々、および現在マーケットで店を営業している河崎生花、まつや呉服の両店舗の方々に行ったインタビューをもとに作成した。河崎生花とまつや呉服には事前のアポイントメントなしに突然訪ねていってしまったにもかかわらず、快くインタビューに応じてくださった。この場を借りて深く御礼とおわびを申し上げる。

(a) 歴史

婦人会の方々の話によると、河崎マーケットが現在の場所に創立されたのは昭和 30（1955）年のことである。その当時は、既に存在していためいりん村（当時の名称は明倫商店街）がかなりの賑わいを見せており、それを見て河崎にも商店街を造ろうという気運が高まったことがマーケット創立の動機とされている。現在河崎マーケットは八間通りに面したところに立地しているが、創立当時、周辺に目立った建物といえば旅館の星出館くらいしかなく、あとはほとんど田んぼだったという。

(b)　過去の業種

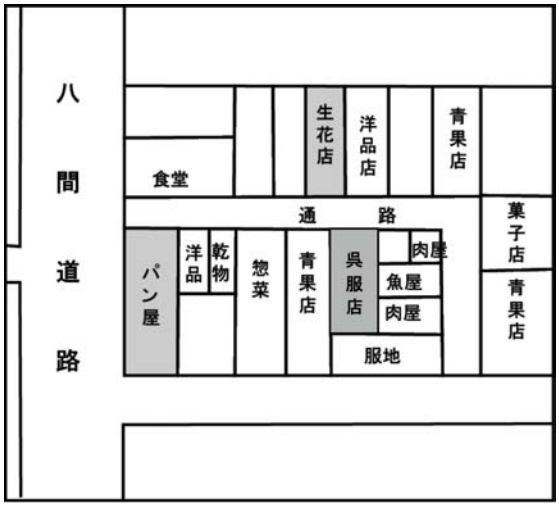
表 1　昭和 30 年代における河崎マーケットの業種

| | |
|---|---|
| 文房具（北島文具玩具） | 魚屋（魚長） |
| 食堂（千代ノ屋） | 肉類（牛虎） |
| 衣料品（斉藤洋品店、丸美や洋品店、タカオカ衣料店、玉屋和洋装店） | 青果（宮下青果店、油徳青果店、岩のや青果店） |
| 呉服（まつや呉服店） | 総菜（橋村食品） |
| 化粧品（ぎおん化粧品） | 佃煮類（大野食品） |
| 金物（いせや金物店） | 乾物（丸一乾物店） |
| 履物（三浦履物店） | 菓子（野原菓子店、聖華堂菓子店、きねや菓子店、あかしや菓子店） |

（河崎げんき会「昭和 30 年代の河崎のこと」をもとに作成）

上の表 1 は、昭和 30 年代の河崎マーケットの業種一覧である。当時は食料品から衣料品まで様々な業種の店が集まっており、生活に必要なものは河崎マーケットに来れば一通り揃えることが可能だった。

図 2　昭和 46 年の河崎マーケットの業種
（灰色の部分が現在も営業している店で、現在の業種を示している）　→




また、右の図 2 は昭和 46 年の河崎マーケットの業種である。灰色の部分は、現在も営業している店を表している。

（c）　特徴・形態

河崎マーケットで店を出していた人は、マーケットを作った地主から店を借り、経済力がついてから所有するという形態をとっていた。店の経営者は、マーケットまで通ってくる人もいれば、住み込み（一階で店を出し、二階で寝泊りをする）で働く人もいるなど、一様ではなかった（河崎生花・まつや）。また、経営者は河崎の出身者よりも、他地域からの人のほうが多かったという（婦人会）。

写真 1　河崎マーケットの入り口の看板
（2009 年 8 月 8 日　筆者撮影）

（d）　全盛期の様子および客層

河崎マーケットの全盛期は昭和 30 ～ 40 年代といわれる。その時代は商店街に人がごった返し、中を通れないことも珍しくなかった。当時、周辺には個人商店しかなかったため、様々な業種の店舗が集まっていたことが河崎マーケットに客が集中した要因といわれている（河崎生花・まつや）。

マーケットを訪れる客層は様々で、理由は定かではないが学生が特に多かったという。客は、地元河崎からはもちろん、周辺の一色や御薗からも訪れる人があった。主に、食料品を買っていく人が多かったという（婦人会）。

（e）　衰退時期とその要因

しかし、全盛期を過ぎると河崎マーケットは次第に衰退の方向に向かい始める。衰退の時期に関しては、「昭和 45 年から下火」（河崎生花・まつや）「昭和 50 年までは順調だった」（婦人会）など、人によって印象は多少異なるようだ。これらの話から、だいたい昭和 50 年前後から下降線をたどり始めたものと考えていいだろう。

インタビューで得られた情報を総合して考えると、河崎マーケットの最も大きな衰退要因は、周辺に大型店やスーパーが進出・郊外拡大し、そちらでまとめ買いをする客が増えたこ

とである。まとめ買い客増加の背景には、前節 2)で述べた「冷蔵庫の普及による買い溜め傾向の高まり」のほかに、パートで働く主婦の増加に伴う専業主婦の減少が考えられる。パートに時間をとられれば、買い物に出向く回数も減り、自然とまとめ買いをする傾向も強まっていく。そうして毎日店に通うという主婦の生活習慣が過去のものとなっていくにつれ、河崎マーケットから客足が遠のいてしまったようだ。

経営者側の要因としては、後継者不足が挙げられる。前節の 2)で述べたように、将来性に乏しい河崎でわざわざ店を継ごうとする若者がいないという理由に加えて、河崎マーケットの歴史は比較的浅く、老舗店がなかったことも後継者不足の一因となっている。

また、昭和 49 年に発生した七夕洪水がマーケットの衰退に影響した可能性もある。もともと河崎マーケット周辺の土地は水はけがあまりよくなかったようで、そのため被害が拡大し、結果的にその後のマーケット衰退の一因になったということも考えられなくはない。

(f)　現状および今後の見通し

現在、河崎マーケットで店を出しているのはパン屋（ベーカーズプリンス）、花屋（河崎生花）、呉服屋（まつや）の三軒で、昭和 30 年代から残っているのは呉服屋のまつやのみである。このうち、パン屋は八間通りに面した位置にあり、近くに他のパン屋がないことから繁盛しているようで、花屋にも祭礼準備などで常連客がしばしば訪れるという。しかし呉服屋は「開店休業状態」で、客はほとんど来ないようだ（婦人会）。

写真 2 河崎マーケットの内部　（同日撮影）

また、店舗数の少なさ以上に設備面に問題があり、アーケードに穴が開いている（写真 2）など、かなり商店街の老朽化が進んでいる。そのため、今では河崎マーケットのことを「お化けマーケット」と呼ぶ者まで出てくる始末である（婦人会）。

マーケットの今後に関しては、後継者不足や店舗数の少なさ、設備の老朽化に加え、土地を買い取るにしても地権が複雑という事情があるらしく（婦人会）、復興は難しいとする見方が大勢を占めている。以前は活性化に向けた取り組みを行っていたが、現在ではもうやっていないという（婦人会）。現在の河崎マーケットを取り巻く状況から察するに、やろうとしても「できない」というのが実状だろう。

4)　めいりん村・しんみち商店街

めいりん村およびしんみち商店街の調査は、実際に現地を訪れ、関係者に話を伺うという形で行った。こちらも事前のアポイントメントなしに突然伺ったのだが、それでも快くインタビューに応じてくださった両商店街の方々におわびと、改めて御礼を申し上げる。

(a)　歴史

めいりん村は、終戦直後の昭和 21（1946）年にできたとされている。めいりん村に関し

ては、戦後宇治山田駅前に展開されていた闇市が起源とされており、最初から商店街として設立された河崎マーケットやしんみち商店街とは創立要因が異なっている。

しんみち商店街の創立は大正時代とされており、本稿で取り上げる三つの商店街の中では最も長い歴史を持っている。創立当初は付近に遊郭があり（大正の終わりには廃止）、当時は主にそこの客を相手に商売をしていたようだ。

（b） 特徴および全盛期の様子

二つの商店街で決定的に違うのは、商店街の規模だ。めいりん村は河崎マーケットと同じくらい道幅が狭く、自動車が通行するのはまず不可能だが、しんみち商店街は優に自動車が入れるだけの幅を有している。さらにしんみちのほうは全長が 800m もあり、かなり長い。そのため、「しんみちは現在の伊勢市の規模に対して大きすぎる」（伊勢河崎まちづくり衆・高橋さん）という声も聞かれる。

業種に関しては、めいりん村は八百屋や魚屋などの食料品関係、しんみち商店街は衣料品関係の店舗が中心をなしていた。高橋さんによると、しんみち商店街に衣料品店が多いのは、伊勢が地域の中心だからである。また、しんみち商店街には古い店が多く、現在出店している店のおよそ八割は昭和の初めから営業を続けているという。

商店街が最も賑わっていた時期は、めいりん村が昭和 30 年代、しんみち商店街が大正時代および昭和 30 年代と、いずれも昭和 30 年代に全盛期を迎えていたことがわかる。中でもしんみちは人が横断できないほど客がいたといい、かなりの賑わいを見せていたようだ。

（c） 衰退時期とその要因

めいりん村で店の減少が目立ち始めたのは平成に入ってからということで、比較的近年まで元気だったようだ。ただ、衰退要因はスーパーに客をとられたことだとされており、ここに他の商店街との共通点がうかがえる。

一方、しんみち商店街の衰退が始まったのは、河崎マーケットとほぼ同時期である昭和 40 年代後半からだという。衰退要因としては、ショッピングセンターの開業やモータリゼーションが進んだことだとされている。

（d） 現状

現在、めいりん村の客の大半は地元の高齢者である。以前は若者や観光客も姿を見せていたようだが、今はそのような人たちはほとんど訪れなくなっている。東海けいざい（2007）によると、2006 年 8 月には「商店街」の暗いイメージを払拭させるために、名称を「明倫商店街」から「めいりん村」へと変更し、さらに同年秋には休憩所として商店街内に「村の駅」を設立するなど活性化に向けた取り組みが行われている。実際に、こう

写真 3　めいりん村の現在の様子（同日撮影）

した努力によって店舗数の減少には歯止めがかかったといい、ささやかではあるが先行きのよさを感じることができる。

一方、しんみち商店街には伊勢一円（地元の伊勢市や志摩地方など。河崎を含む）から客が集まり、客の年齢層も幅広いという。活性化策としては、周辺の商店街（めいりん村も）と連携して祭りを行ったりしていることなどが挙げられる。

5）　まとめ

ここまで紹介してきたように、それぞれの商店街を取り巻く状況は芳しくない。特に河崎マーケットに関しては、先がまったく見えないといっても過言ではないところまで追い詰められている。正直、河崎マーケットが商店街として賑わいを取り戻すことは事実上不可能であろう。実際、河崎生花や婦人会の方々も、「河崎マーケットの復活は難しい」と語っている。

一方のめいりん村やしんみち商店街はというと、どちらも衰退傾向にはありながらも、現時点では商店街としての体裁は保たれている。同じ伊勢市内にあり、しかもそれぞれが比較的近接しているにもかかわらず、河崎マーケットだけが著しく衰退してしまった理由は何であろうか。

各商店街関係者へのインタビューから、いずれの商店街も昭和 30 年代に全盛期を迎えており、主な衰退要因が大型店やスーパーに客をとられたため、ということは共通していることがわかった。衰退が始まった時期に関しても、河崎マーケットとしんみち商店街はおおよそ昭和 50 年前後で一致している。つまり、商店街自体の存続が困難になるまで衰退したことに関しては、「大型店への客の流出」のほかにもファクターを求めないと説明できないことになる。

ここで考えられる最大の要因は「商店街の規模の違い」である。商店街そのものの規模が小さければ、必然的に店舗数も限られてくる。そのような状況で、本節 3)の(e)で挙げたような要因によって店が撤退すると、規模が小さい分、一つの店がなくなっただけでも商店街自体への損失は大きくなってしまう。

実際、河崎マーケットの規模はめいりん村よりも小さい。しんみち商店街とは比べ物にならない。「最低限の食料品が揃わないと、マーケットが成り立たない」（河崎生花・まつや）というように、河崎マーケットは食料品中心の商店街だった。そのため、もし食料品関係の要である肉屋や魚屋がなくなれば、自然と客は商店街に足を運ばなくなるだろう。客が減ると、それにつれてまたどんどん店も減っていき、さらに客も減っていく…という悪循環に陥ってしまう。河崎マーケットの衰退が、めいりん村やしんみち商店街よりも著しかったのは、こういった事情が絡んでいたためだと思われる。

河崎マーケットは地域の幹線道路である八間道路に面しており、伊勢市駅からもあまり離れていないなど、立地自体は悪くない。そのため、もし複雑な地権の問題が解決し、土地を買い取ろうとする動きが出てくれば、マーケットが河崎に貢献する「なにか」に生まれ変わることがあるかもしれない。しかし、河崎マーケットが「商店街」として復興する余地は、もはや残されていないといえるだろう。

## ４．蔵の転用

### 1)　蔵の保存運動の起こり

前章で述べたように、問屋街としての河崎は完全に衰退している。そしてその象徴であった河崎の蔵や勢田川は、昔のような機能を有しているとはいえない。蔵においては、空き蔵が多く、家財をしまう物置として利用されているところがほとんど、というのが現状である。

また、伊勢市では昭和 49（1974）年に、台風がもたらした豪雨のため、勢田川が氾濫し、付近に多大な被害をもたらした七夕水害が起こった。この水害をきっかけとして、特に治水工事の行われていなかった勢田川を一級河川に指定し、護岸工事をおこなった。このとき、勢田川沿いの河崎において、川の拡幅のために、右岸の空き蔵を取り潰し、また、左岸に管理道路を設けた。当然河崎の蔵や川の風景が取り壊されてしまう。このため、河川改修をきっかけに、河崎の街を再評価する動きが見られ、ついに街並み保存運動が起こった。

しかし、河崎は空き蔵が多く、街並みを保存しようにも、蔵は利用されないため老朽化し、やがては潰されてしまう。そのため、蔵を利用することによって、空き蔵を保全し、街づくりに役立てようという動きが始まった。この動きをサポートするため、蔵バンクが平成 8 年（1997 年）に発足した。

### 2)　蔵バンクとは

蔵バンクとは具体的にどのような活動をしているのだろうか。蔵バンクは町並み保存の一環として、蔵を保全し、その蔵のあり方や歴史を調査・研究すると共に、蔵をどのように活用するかを検討している。さらに、蔵の活用方法の一つとして、河崎の現在使われていない空き蔵を斡旋し、写真 4 のように喫茶店や居酒屋、工房や美容室などへの転用をサポートしている。

写真 4　蔵の美容室への転用例　（同日撮影）

蔵を転用する際、いくつかの利点がある。まず、蔵はがらんどうであるということ。問屋街としての機能が衰退し河崎においては、ほとんどの蔵は利用されておらず、ただの物置と化している蔵が多い（まちづくり衆・高橋さん）。

もちろん、蔵の活用は蔵の保全につながる。空き蔵が利用されないまま老朽化し、最終的に取り壊されるということを防ぐ。空き蔵の有効活用は、それだけで蔵の保全となる。

さらに、この蔵を活用して保全することで、河崎の街並みを保存する運動にも一役買っている。

### 3)　蔵の転用の課題

しかし、蔵の転用には課題も多い。まず、蔵を転用する上で、敷地の形状などから、活用に制約があることが挙げられる。建蔽率等の問題で、蔵を壊してしまうとそこに新たな店を作るのは厳しいという状況がある。だから、自由に空き蔵を理由できるというものではないため、やや不便を感じる可能性もある。

また、すべての家が蔵を保全し、活用するという考えに賛同しているわけではない。いくつかの家では空き蔵を蔵バンクに貸すことを拒んでいる。その理由として、「面倒である、何か起きたら困る、家財道具を置いているなど」（高橋さん）である。さらに、空き蔵が飲食店や工房に転用されることにより、騒音などが起こり、それを嫌がる人がいないともいえない。

4)　まとめ

現状では、すべての家が河崎の空き蔵の転用に協力的とは言えず、また、蔵の転用による河崎の商業の復興が見られるというほどでもない。しかし、まちづくりや街並み復興と一体化させて、河崎の新しい商業の形を探るという方法の一つとして、蔵の転用はよい効果を与えるのではないかと思われる。

## ５．まとめ

河崎の商業は、問屋業を中心に昭和 40 ～ 50 年頃から衰退傾向が見られている。また、その商業の復興も難しく、例えば河崎マーケットなどは著しく衰退しており、ほとんどその機能を果たしていない。河崎全体を見渡しても、「商業の街」としての復興は困難であると見られている。しかし、蔵のような河崎特有の建造物が多く残っていることから、観光地として発展する余地はあると見られ、それを意識したまちづくりも進められている。また、商業地区という側面以外にも目を向ければ、住宅地としての発展という道も残されている。一方で、河崎の全ての商業が落ち込んでいるわけではない。まちづくりの一環ではあるが、蔵の転用などによる新しい業種（工房やカフェ）も出現してきており、河崎という町の活性化に向けた取り組みは行われている。

【参考文献・Web サイト】

・東海けいざい(2007)「“めいりん村”で再出発　活性化へあの手この手」
http://www.presstokei.co.jp/?p=3284

# Ⅱ．勢田川と世古の移り変わり

本多あずさ・和田崇宏

１．はじめに
２．勢田川と世古の昔
　1）勢田川の利用
　2）世古の概要
　3）世古の利用
　　（a）川側の世古
　　（b）陸側の世古
３．勢田川の改修
　1）七夕災害
　2）改修工事
４．勢田川の今
　1）勢田川の景観変化
　2）勢田川の現況
５．世古の今
　1）現在の世古の様子
　2）世古の保存の取り組み
６．まとめ

## １．はじめに

本稿では、三重県伊勢市河崎を流れる勢田川と、その周辺に存在する「世古」と呼ばれる路地を調査の対象とした。本稿の目的は、河崎の中心を流れる勢田川と、川や大通りをつなぐ細道である世古がどのような役目を果たしていたか､そして現在どのような役割を果たしているかを調査し、比較することで、河崎における生活や人々の変化を知ることである。私たちは、現地を実際に歩くことで現在の姿を知り、かつての河崎について知る人に話を聞いて過去についてまとめることで、このテーマにアプローチすることとした。以下では、はじめに過去の河崎について述べた後、河崎に劇的な変化をもたらした勢田川の改修にふれ、最後に世古の現在の姿と、今後の保存への取り組みを述べる。

## ２．勢田川と世古の昔

### 1）勢田川の利用

卸売の町・河崎において、勢田川の果たす役割は大きい。商品の運搬は卸売業の要である。

勢田川はその水運の足として重要であった。満潮の時に川を上り、干潮の間は停泊、再び満潮になると川を下るというように、船は潮の干満を利用して川へと入った。

河崎へ到着した船は川岸に横付けし、船から陸へと板を渡して荷物の上げ下ろしをした。川側に立ち並ぶ蔵には、船から直接品物が運び込まれた。蔵は所有者たちがそれぞれに建てたため、河岸線はまっすぐにならなかった（写真 1）。中橋辺りには船着場があり、そこで上げ下ろしを行なったようだ。

写真１　河岸にある当時の蔵が保存されている
（2009 年 8 月 10 日筆者撮影）

2）世古の概要

世古は、伊勢地方の方言で小道や路地を指す。河崎では特に、表通りと川の行き来、表通りと裏通りの行き来の必要性から発生した。表通りは長く、川から行き来するには迂回しなければならない。その手間を省くには、表通りと川岸をつなぐ道が必要だった。人々は、建物を建てるときに隣との間に土地を残し、道とした（写真２）。

いくつかの世古には名前がある。周辺の仏寺、職業・店の名前、方角などから名づけられており、人々の生活との関わりが感じられる。

写真 2　隣家との間につくられた世古
（2009 年 8 月 10 日筆者撮影）

3）世古の利用

(a) 川側の世古

勢田川を使って運ばれてきた商品は、店へと運び込まれる。川に面した蔵を持っていればよいが、持っていない場合は川岸から荷物を運び込む必要がある。そういったとき、世古を通って表の店舗へとすばやく荷物を運ぶことができた。川と表通りを結ぶ世古は、主に店の従業員によって、仕事のために使われていた。川から店へと荷物をつなぐ役割を果たしていたのである。

(b) 陸側の世古

表通りと裏通りをつなぐ世古は、川側の世古とは少々異なる性格を持つ。荷物の運搬よりも、裏通りと表通りの人の行き来に使われた。近隣関係が親密だったこともあり、住人であれば誰でも利用することができた。商売の場ではなかったので、子どもが鬼ごっこやかくれんぼなどをして遊ぶこともあった。

また、川側の世古には名前がないのに対し、陸側では名前がつけられた世古が多かった。これは、公共的に利用されていたため、世古を使う人々によって名づけられたのだと考えられる。

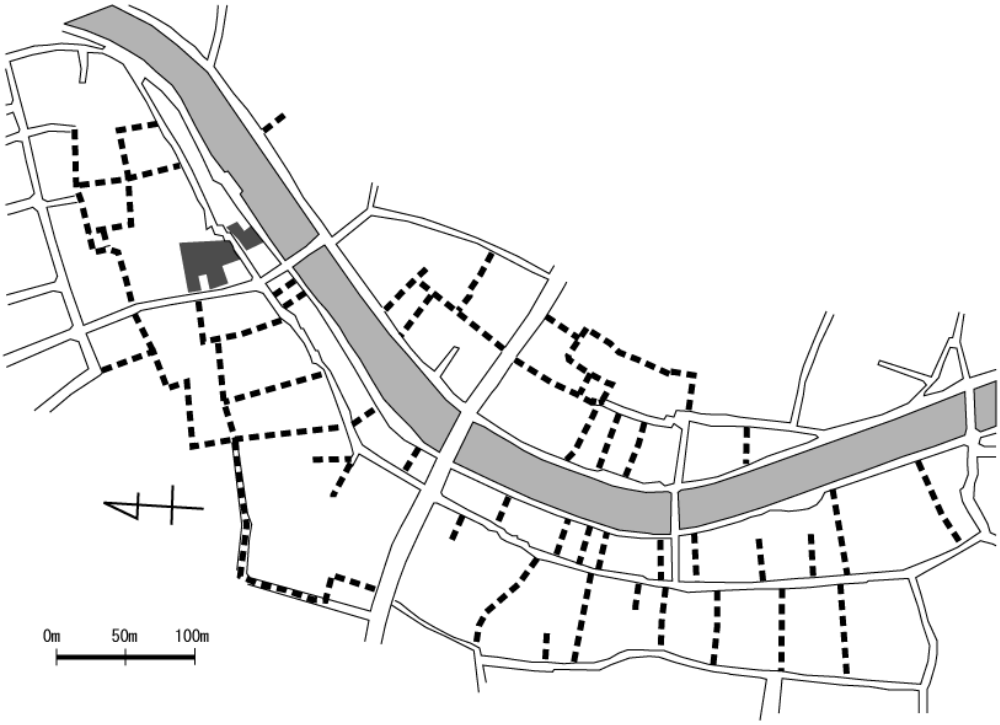



図１　世古の分布（点線が世古を表している）
川の東側が右岸、西側が左岸である。左岸を川沿いに走る道が河崎本通りである。
（伊勢河崎商人館作成の資料により作成）

３．勢田川の改修

1）七夕災害

勢田川は昭和 49（1974）年の七夕災害において氾濫し、伊勢市市街地の大部分の家屋が浸水した。その被害状況は、浸水面積 3,051ha、死者 2 名、家屋全壊 1 世帯、床上浸水 3,224 戸、床下浸水 10,924 戸というものであった。河崎は、他の土地と比べると、土地が高い場所であったため、浸水の被害を受けることはなかったが、浸水の原因として建設省（当時）から勢田川の川幅が狭いからであると断定されたため、勢田川の川幅を広げることを目的とする激甚災害特別復旧事業が、昭和 51（1976）年から 5 年間にわたって行われた。

2）改修工事

建設省が発表した勢田川の改修事業は、勢田川の川幅を広げるために、勢田川沿いの 6 つの町で約 300 戸の立ち退きを必要とするものであった。そこで、住民からは、「勢田川の氾濫の原因は勢田川の川幅の狭さにあるのではなく、上流部の田畑や山が開発されたために、勢田川の保水力が低下したからである。」という河川改修に対する反対の声が上がった。河崎は浸水の被害を受けなかったにもかかわらず、立ち退きの対象地区となったため、住民の反対運動が起こったが、訴訟などには発展せず、最終的には、改修のため、125 戸が立ち退くことになった。立ち退きは右岸地区が対象になり、右岸地区が立ち退いた分、勢田川の河床が右岸側に寄る形で河川改修が行われた。その結果、現在のような街並み、勢田川へと変化したのである。

４．勢田川の今

1）勢田川の景観変化

まず、景観変化として、川沿いの右岸側にせり出すように立っていた蔵が取り壊されたため、昔ながらの風景が失われたということが挙げられる。河崎の昔ながらの風景の大きな変化がこれによって起こった。

また、勢田川と両岸の間には、石とコンクリートで作られた河川敷のようなものと堤防が作られた。ここは、コンクリートによって作られているため、草が生えておらず、自然的な風景とは言いがたい（写真 3）。

かつて、魚があまり生息していない時期もあった勢田川だが、現在ではコノシロなどの魚も生息している。さらに、それに伴って、鳥が飛来するようになった。

写真 3　コンクリートで固められた河岸

（2009 年 8 月 10 日筆者撮影）

2）勢田川の現況

勢田川では、かつて水質が悪かったということもあり、環境保全の取り組みも行われている。川べりのごみ拾いや草取りなどの手入れが住民によって定期的に行われており、河川環境は改善しつつある。また、浚渫も行われており、ヘドロの除去や川底を深くして、洪水対策を行っている。

現在では、商売用の船が入ってくることはないが、自家用の船を持っている家庭はいくつか存在する。さらに、観光のために、「伊勢船型」と呼ばれる伊勢の伝統的な木造船を復元

した「みずき号」と呼ばれる船が、河崎と神社との間を定期的に運航している。

５．世古の今

1）現在の世古の様子

現在の世古は、人の行き来としての利用のみである。というのも、道幅の関係で自動車が通れないところがほとんどであるからである。また、世古は私道であるため、現在は持ち主が囲いをするなどして立ち入りを制限しているところも存在する。さらに、家を建て直す際に、世古を取り込むこともあるため、世古は減少傾向にある。というのも、持ち主が私道であることを認めて申請すると法的に道（公道、市道）となるが、申請しないと税金がかかるため、余計な出費を抑えるために、私有地に取り込むからである。

2） 世古の保存の取り組み

世古の保存への取り組みとして、伊勢市による保存事業があげられる。しかし、事業の対象となっているのは、本町、吹上、宮尻一丁目などであり、河崎は含まれていない。世古が保存されている地域は、世古の名前が刻まれた石の標識を立てて保存している。

河崎は事業対象となっていないため、自治体の協力を受けることは期待できない。さらに、景観保存の条例等も存在しないため、法的な拘束力が存在せず、取り壊そうとしている家があれば、訪問して取り込まないよう依頼することしかできないのが現状である。もしくは、市に申請して、公道として管理してもらうことを求めている。市としても、世古を保存はしたいが、私有地になるため、保存できないといった状況である。

伊勢河崎まちづくり衆は、1997 年に調査を行い、「南新橋世古」や「うどん屋世古」など、当時名前がついていなかった世古に名前をつけて、保存をしようとしている。

Ⅵ、 まとめ

商売の町として発展した河崎では、勢田川は重要な交通路であり、人々は川から世古を使って運ばれてきた商品を運んでいた。勢田川と世古は、ひとつながりとなって生活や商売を支えていたといえる。

ところが、陸路の発達にともなって次第に水運としての勢田川は使われなくなった。加えて七夕豪雨の被害を発端として、改修工事が行われた。河岸には河川管理道路が築かれ、人々の生活と川は完全に切り離されてしまった。川と人々を結ぶ役割であった世古もまた必要性は失われてしまった。現在は、人の行き来に利用されるだけである。

建物の保存は行われるようになったが、河崎の町並みの一部である世古に対しては、十分な措置がとられていない。世古を保存するためには、住民だけでなく多くの人にその価値を理解される必要がある。

本稿において、多大な協力を頂いた地理学教室の大場先生、現地で我々に話をしてくださった富田さん、礒さん、長尾さん、柴田さん、そして、げんき会と商人館のスタッフの方々にこの場を借りて感謝の意を表す。

【参考資料】

・Wikipedia 昭和 49 年台風第 8 号
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%AD%E5%92%8C49%E5%B9%B4%E5%8F%B0%E9%A2%A8%E7%AC%AC8%E5%8F%B7

・三重河川国道事務所　http://www.cbr.mlit.go.jp/mie/

# Ⅲ．本河崎と向河崎

出水 束・山本 達也

１．はじめに
２．第二次大戦前～戦後にかけての両河崎の違い
　1）両地区に住む人々の業種の違い
　2）本河崎と向河崎の関係
　3）河崎の商業の変遷
　4）河崎の商業が衰退した原因
３．現在の両河崎の関係
　1）現在両地区がどのような役割を担っているのか
　2）両河崎に住む住人の意識の違い
４．おわりに　－今回の調査を通じての新たな発見－

## １．はじめに

私たちは、勢田川を挟んで存在する本河崎と向河崎の間にみられる独特の関係性に興味を持ち、その関係性を、テーマに調査を行った。調べていく過程で明らかになったのは、河崎の街でも右岸と左岸ではかなりの相違点が見られ、その相違もまた、時代の変遷に伴って変化してきている、という実情であった。今回の河崎における実地調査では、現地の方々へのインタビューと、実際に自分たちで街並みを観察して、発見したものを含めて明らかになった、両河崎地区の違いと関係性について、まとめてみたいと思う。

## ２．第二次大戦前～戦後にかけての両河崎の違い

### 1）両地区に住む人々の業種の違い

まず、本河崎（勢田川左岸）についてである。戦前の本河崎は勢田川を利用した水運で栄えた街で、さまざまな物資が運び込まれる問屋街として発展し、江戸時代から昭和の中頃まで伊勢の台所として経済の中心にあった。そのため街は商人であふれ、最盛期は多くの人々で賑わっていたようである。また、河崎地区以外の人々も買い物に訪れるなど、商業の街として本河崎は広く認知されていたようである。

写真１が現在の本河崎の様子である。昔はもっと川幅が広く、現在ある川沿いの道は、七夕豪雨後に設置されたものである。また、写真２はかつての河岸(船着場)を復元したものである。昔は、ここから蔵に直接物資を運び入れていたようである。

写真１　現在の本河崎　　（河崎商人館所蔵）

写真２　　現在に残る船着場跡　（河崎商人館所蔵）

それに対して、向河崎は職人街という色合いが強く、向河崎で作られた商品を本河崎に供給していた。特に畳や表具製造を生業としている人々が多かったようである。また、向河崎に住む人が本河崎の商家の家に住み込みで働くことなどもあったらしい。

写真３　改修以前の向河崎　　（河崎商人館所蔵）

写真４　現在の向河崎　　（河崎商人館所蔵）

2) 本河崎と向河崎の関係

前項で述べたように、戦前の河崎においては、本河崎は商人の街、向河崎は職人の街と、住人の住み分けがなされており、それぞれの特徴を形成していた。中でも、本河崎は河崎の地区外にも販路を持っていたため、自ずと河崎の中心的な役割を担った。そして、向河崎は職人街として、商品を供給することで、本河崎の商売を支えていた。つまり、向河崎から本河崎、そして河崎地区内の顧客へ、という商売のルートが成り立っており、河崎の内部だけで生産から消費が行われていた。このように、商売における両河崎の関係は、切っても切り離せないものであったと考えられる。また、本河崎で祭りなどの行事があった際は、向河崎の人々も多くそちらに参加していたという話も、現地の方々へのインタビューから知ることが出来た（河崎げんき会の方々への聞き取り調査より）。この話から推察すれば、向河崎の人々は本河崎に対し一種の憧れのような気持ちを抱いていたのかもしれない。

3) 河崎の商業の変遷

表１　廃業した店舗の業種別内訳

| 業　種 | 廃業した店舗数 | 昭和期の店舗数 | 廃業率 |
|---|---|---|---|
| 食料品小売販売、卸売、製造 | 40 | 58 | 69 % |
| 雑貨・衣料品小売販売、卸売 | 31 | 47 | 66 % |
| 医療、サービス | 9 | 18 | 50 % |
| 飲食品店 | 2 | 6 | 33 % |
| 機械、製造業、その他 | 12 | 53 | 23 % |
| **計** | **94** | **182** | **52%** |

表１は業種別の廃業率を示した表である。表を見ると、食料品・雑貨・衣料品などの小売・卸売業者の廃業が目立つ。その一方で、飲食店と機械、製造業は、廃業率が比較的低く止まっている。このことから、本河崎の商売自体が非常に衰退していることが分かる。それに伴い向河崎の製造業も衰退していくわけだが、卸売などの廃業率に比べ、その廃業率は小さいものとなっている。これは、本河崎の商売は輸送手段の変化などにより急激に衰退したものの、製造の段階においては、輸送形態の変化はそれほど影響はなかったため、向河崎の製造業はそこまで甚大な被害を受けなかったためであろう。今回の調査で本河崎を訪れた際も、商業で賑わっているという感じは受けず、むしろ観光業などで成り立つ街といった印象を受けた。

表２　移転した店舗の業種別内訳

| 業　種 | 移転した店舗数 | 昭和期の店舗数 | 移転率 |
|---|---|---|---|
| 食料品小売販売、卸売、製造 | 9 | 58 | 16% |
| 雑貨・衣料品小売販売、卸売 | 6 | 47 | 13% |
| 医療、サービス | 0 | 18 | 0% |
| 飲食品店 | 2 | 6 | 33% |
| 機械、製造業、その他 | 12 | 53 | 23% |
| **計** | **29** | **182** | **16％** |

表２は、移転した店舗の業種別内訳である。食料品店の移転率が高率になっているが、これは物資の保管場所に大量の土地がいるため､他の広い土地がある場所に移動したためだと思われる。河崎の食料品店が小規模経営であったため、郊外の大型スーパーなどとの競争力を失ったのも移転した一つの原因であろう。機械・製造業における移転率の高さにも同じような要因があったと思われる。一方、医療・サービスの移転率は０％となっている。もともと河崎の医療施設は地元の人々を対象にしており､現在でもそれが続いているからであろう。また、これらの業種は、特に大きな土地を必要とするわけではないため、わざわざ土地を求めて、どこかに移転する必要もない。これらの理由のため、医療・サービス業は河崎に残り続けているのだろう。

4)　商業の衰退の原因

時代が進むにつれて、商業の街としての色を薄めてきた河崎であるが、その原因はひとつではない。いくつかの要素が重なり、その結果として現在の河崎の衰退を招いている。まず、最大の原因と考えられるのが、輸送形態の変化に伴う水運の衰退である。勢田川の水運を利用して商業を発展させてきた河崎にとって、第二次大戦後、船輸送から、馬、車などの陸運が輸送形態の主流となっていく中で、もともと水運を基盤に設計された河崎の街は、急速に立ち行かなくなってしまった。また、河崎は川に対しては開けた構造であったが、内部の道はそれほど広くなかったため、トラックなどの大型輸送車の進入は困難であり、これも陸運に対応できなかった一因であったようだ。他の要因としては、勢田川の護岸工事に伴う河岸の店舗の移転・廃業、交通手段の変化による、顧客離れ、若い世代の流出にともなう後継者不足などが挙げられる。これらの要因が複合的に作用した結果、河崎の街の商業は立ち行きにくくなっていったようであり、今後も以前のように戻ることは考えにくい。

３．現在の両河崎の関係

1)　現在両地区がどのような役割を担っているか

実際に現地を観察してみて、前項でも述べたように河崎の商売が衰退したためか、両地区に大きな違いは感じなかった。どちらの地区も、基本的には住宅地といった印象であった。違いを見出すとするなら、本河崎は昔の蔵などを利用して商売をしている店があったりして、過去に商売で栄えていた河崎の面影を見ることが出来る。また、本河崎の本通りには河崎商

人館等の観光施設もいくつか点在しており、観光業に力を注ぐ部分も見えた。昔ながらの建造物も多く残っており、このまま観光業に力を入れていっても、おもしろいのではないかと、個人的に感じた。向河崎についてだが、空き地が多かったように思われる。今回の調査ではあまり時間がなく、向河崎の調査は少ししかできなかったので、一概には言えないが。現在では、向河崎で作った製品を、本河崎で売るといった構図はほとんどないようで、両地区の関係は非常に希薄なものとなっている。

2) 両河崎に住む住民の意識の違い

先にも述べたとおり、戦前の河崎においては、「向河崎が製造し、本河崎が卸す」という関係があり、どことなく本河崎を主、向河崎を従とする構図があったように感じられた。本河崎は商店があり、その旦那衆ともなると羽振りもよく、職人とは生活水準に開きがあったと考えられる。そのためか、向河崎の住人には、本河崎に対する一種の憧れのようなものが感じられた。しかし先ほどにも述べたように、本河崎の商業自体が衰退しており、本河崎の人々が向河崎の人々より経済力があるといった差異は現在ではほとんどないようである。現地での聞き取り調査においても、両地区の住民に意識の違いは感じられなかった。

## ４．おわりに　－調査を通じての新たな発見－

今回の調査の大きな目的は、今までの研究成果などにみられる定説を打ち破るような事実を発見することであったが、残念ながら本河崎と向河崎との間の関係性に新たな一面を見いだすことはできなかった。本河崎の商家しか所有していなかった蔵らしきものを向河崎でも確認するという新たな発見もあるにはあったが、その後の調査によりその蔵の所有者は本河崎の人々であったことが判明し、向河崎にはほとんど職人の方々しか生活してなかったという今までの説を崩すに至ることはできなかった。

研究成果としては、結果的に去年のものを踏襲する形になってしまったが、今回の調査で本河崎と向河崎を昔のように区別するのではなく、同じ一つの街として河崎が発展していこうとしている様子を知ることができた。例えばこれは、河崎商人館が中心となって両地区の分け隔てなく河崎を盛り上げていこうという姿勢などからも感じられた。両河崎に住む人々の意識の違いも感じられない現在であれば、この動きはより多くの発展を河崎にもたらしてくれると思う。これは大きな収穫であった。この収穫を持って今回のまとめとしたい。

【参考資料】

・「伊勢河崎商人館」HP　http://www.e-net.or.jp/user/machisyu/

・現地でインタビューにご協力いただいた方々（五十音順）

河村　勇さん
長尾正男さんご夫妻
中津修一さん
東出晴夫さん
村田典子さん
山下敏郎さん

# Ⅳ．観光まちづくり～河崎と神社の比較～

坂中　里名・山田　耕

１．はじめに
２．河崎におけるまちづくり
３．神社におけるまちづくり
　1)　神社について
　2)　神社のまちづくり
４．河崎と神社の比較
　1)　河崎と神社のまちづくりの比較
　2)　神社のまちづくりから学べること
５．学生学芸員と河崎
　1)　学生学芸員制度とは
　2)　学生学芸員制度のメリット
　3)　学生学芸員制度の問題点
　4)　まとめ
６．感想

## １．はじめに

本稿では、河崎における観光政策、まちづくりの取り組みの変遷を考察するとともに、河崎に隣接する神社(かみやしろ)の観光政策との比較を行い、河崎のまちづくりの現状を考察する。

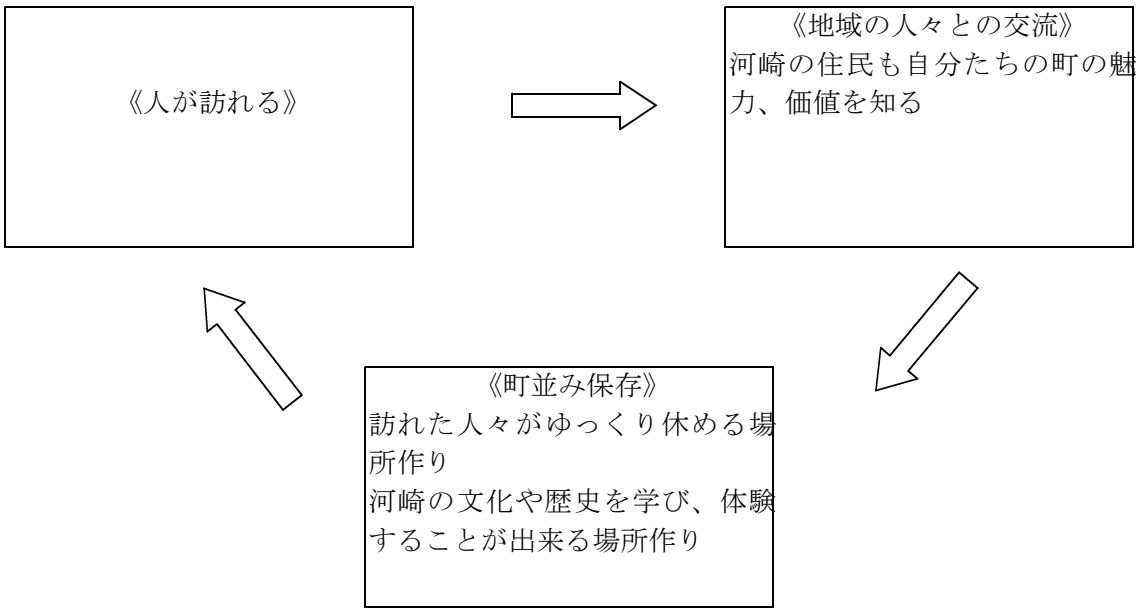
## ２．河崎におけるまちづくり

1)　河崎のまちづくり

河崎のまちづくりは、伊勢河崎商人館を拠点に、NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆や地元の人々が中心となって行われている。具体的な活動内容は、現在は使用されなくなった蔵を管理し、地元で商売を行う店に店舗として貸し出す制度である蔵バンク、商人館内の博物館の展示を行う学生学芸員制度などである。河崎のまちづくりの第一の目標は、地元住民にとって住みよい町を作ることであり、その町並みを活かし、多くの人に河崎を知ってもらうことで、町の活性化につなげようと考えている。

2)　まちづくりのコンセプト

続いて、NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆の理事長である高橋徹氏のまちづくりコンセプトについて紹介したいと思う。上記のように、河崎のまちづくりは住民主体を基本としており、古い町並みを生かした住民生活を目玉としている。高橋氏によれば、河崎におけるまちづくりは以下のようなサイクルを築くことを目標としているようだ。




まず、観光客は古い町並み、商人館を見物しに河崎を訪れる。そして、訪れた観光客と住民とが言葉を交わし、その会話の中から住民側も自分たちの住む場所の魅力、価値を認識する。そして、住民側が間接的にまちづくりに対しての認識を深め、自発的な参加を促されることとなり、その結果、住民主体のまちづくりという河崎におけるまちづくりの最大の目標を成し遂げることが可能となる。また、一連のこうした活動を通じて、高齢化、若者の町離れの進んだ河崎の町自体の活性化も同時に進めることにもつながる。河崎におけるこのような一連の活動は、観光、まちづくり、まちおこしが一体化された妙案であるといえるだろう。

## ３．神社におけるまちづくり

1)　神社について

神社は、五十鈴川と勢田川の分岐点に位置し、江戸時代から明治時代にかけて、伊勢神宮の参拝客で賑わった港町である。また鉄道や自動車がなかった当時は、河崎などの勢田川上流地域へ全国からやってくる物資を船で運んでいたため、神社は海と川をつなぐ中継地点であった。港周辺の町には商店や宿屋、遊郭などがたくさんあり、活気のある町であった（図１参照）。しかし、明治 30（1897）年に参宮鉄道が引かれて以降、港は衰退の一途をたどった。

鉄道の発展によって、かつての港としての機能を完全に失った神社であったが、隣町である河崎が独自の町並みや文化を活かしたまちづくりを始めたことをきっかけに、「伊勢の海の玄関口」であった神社を外部にアピールしようとする動きが起こった。現在では NPO 法人「神社みなとまち再生グループ」が中心となり、まちづくり活動が行われている。

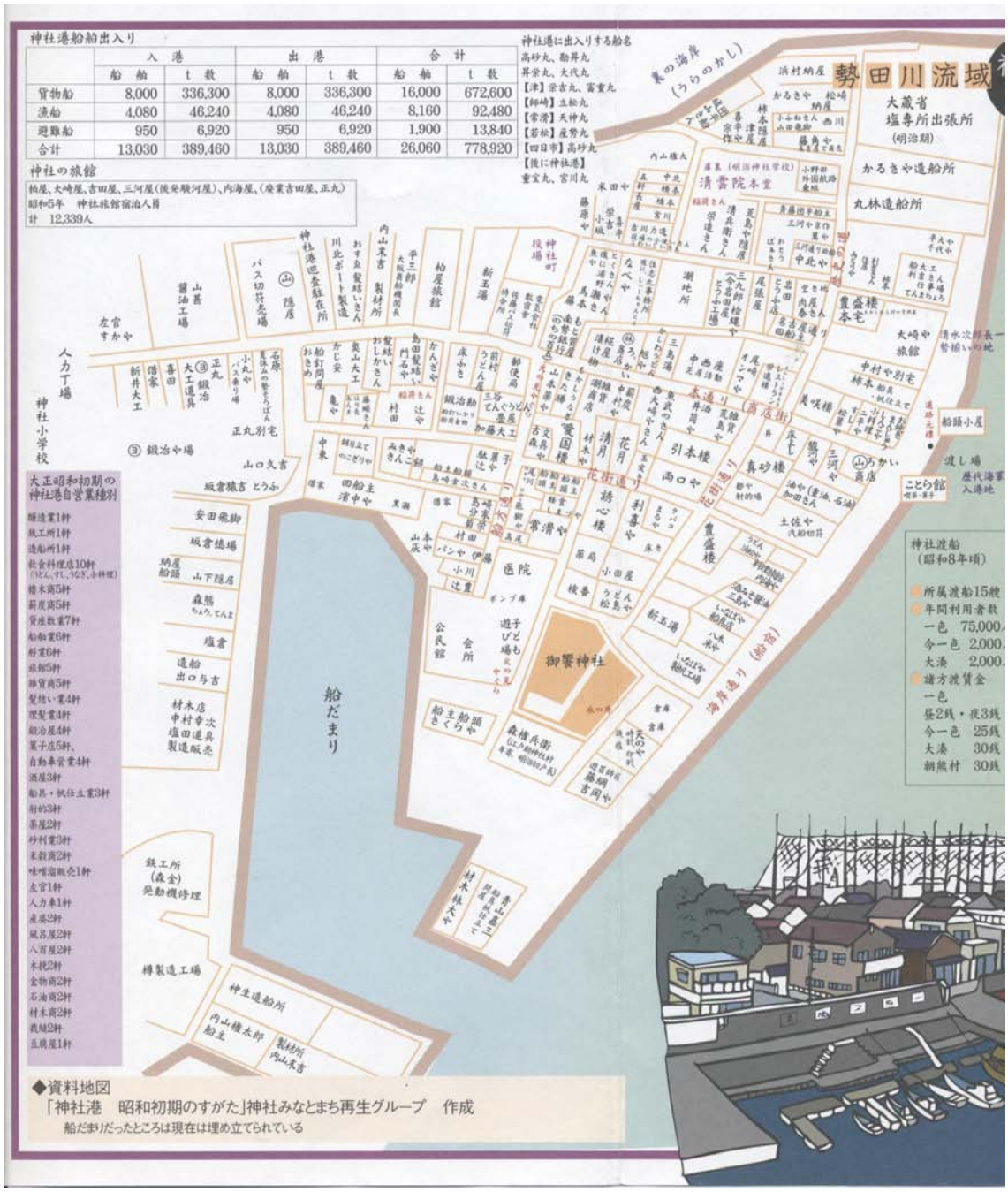



図１　明治初期の神社（神社みなとまち再生グループ資料より）

2)　神社のまちづくり

神社のまちづくりの中心的な役割を担っている NPO 法人「神社みなとまち再生グループ」は、以前民家であった建物を改装した「海の駅」を拠点に活動している。具体的な活動としては、かつて神社と河崎をつないだ船を再現した木造船「みずき」での勢田川観光、月 1 回の川の掃除、港の歴史を学ぶことができる資料の展示などが挙げられる。また、中部国際空港からの神宮への観光客を船で運ぶ「船参宮」実現に向けた活動や、親子で参加できるシーカヤック・マラソン大会を開催するなど、外部だけでなく、伊勢市内に向けてもまちづく

りを積極的に PR している。これらの活動の目的は、港を観光地として整備し、外から人々を呼び込むことで町を発展させることであり、神社を一種の観光地として確立させることを主眼としている。

## ４．河崎と神社の比較

1)　河崎と神社のまちづくりの比較

では、河崎と神社のまちづくりは一体どのような点において異なっているのだろうか。まず、前項にあったように、河崎は昔ながらの風情を活かし、そこに現在住んでいる住民の生活感を観光対象としており、河崎を一般的な観光地化することを目的とはしていないといえるが、神社はあくまでも港を観光地として整備し、外から人々を呼び込むことで町を発展させることを主眼としているという点において違いが見られる。その背景には、河崎は勢田川沿いに並んだ昔ながらの民家や蔵が多く残っていたため、それらを活かした観光客の呼び込みが可能であるのに対し、神社には参宮客で栄えたかつての町並みが現在ではほとんど残っていないため、観光客を引き寄せることが難しいという実態がある。そのため、神社が観光地として発展するには、人が訪れる目的となるものを作らなければならない。このようなそれぞれの町の現状が、理想とするまちづくり像の違いを生み出したと推測する。しかし目指すまちづくりの方向性が若干異なろうとも、勢田川を活かした二つの地域間のつながりは今も昔も変わらず存在する。実際、神社は「海の駅」、河崎は「川の駅」として、かつての勢田川舟運を再現した観光事業が行われている。

2)　神社のまちづくりから学べること

上記のように、河崎と神社のまちづくり像はそれぞれ異なるが、どちらも勢田川と共に歩んできた歴史を踏まえ、町の活性化につなげる活動を行っている共通点があるので、協力し合い、互いに学び合うことが可能だろう。今回調査をして印象的だったのは、神社は観光客を呼び込むための町並みがあまり残っていないという難点を抱えながらも、「伊勢の海の玄関口」としての機能を取り戻そうとさまざまな模索を続けていることであった。まちづくりは町そのものがテーマであるため、その土地ならではの魅力もあれば、逆に欠点になりうるものも存在するだろう。独自の魅力をどう活かすか、また地域の活性化を進めるにあたって欠点となるものをどう対処していくかが、まちづくりの重要なポイントの一つではなかろうか。

## ５．学生学芸員と河崎

1)　学生学芸員制度とは

ここでは、河崎のまちづくりにおいて非常に重要な役割を担っているといえる学生学芸員制度について紹介したい。この制度は、地元の皇學館大学の学生が、伊勢河崎商人館の中にある博物館の展示や、それに必要な調査・研究に参加することができるといったもので、参加者は博物館学芸員過程の学生から、河崎の町に興味を持った学生まで様々である。このような活動が始まったのは、商人館が開館する前に、当時河崎を調査していた大学院生が、商人館内部に展示スペースを作ろうと考えていた町の人々に協力したことがきっかけで、現在では約 10 人弱の学生が週 1 回集まって取り組んでいる。平成 18 年には、文化庁の協力の下「地域と大学との連携により育てる「河崎まちづくり学生学芸員制度」構想」が採択され、地域と大学が協力し、まちづくりに貢献する学生学芸員を育成する仕組みが整えられた。学生たちは河崎に関係するテーマを自由に選択し、それに伴う調査・研究、目録作成、展示の準備などを専門的な知識を持った人のアドバイスを受け、自らの手で行っている。彼らは、河崎から派生し、より広い範囲へとつながるテーマを考え、時代の流れとともに変化してしまったかつての河崎の町をより多くの人に知ってもらえるような展示を心がけている。

展示の様子（伊勢河崎商人館 HP より）

2)　学生学芸員制度のメリット

学生学芸員制度が始まったことにより、商人館としては、河崎の町をより学問的な視点から捉え、訪れた人々に理解してもらえることが可能になった。学生が調査・研究する過程で、地元住民との交流が生まれ、地域の活性化につながることも学生学芸員制度のメリットの一つである。また、学生にとっても、この活動を通じて今まで学んできた専門知識を実際に活かすことができ、ここでの経験が自身の研究をさらに発展させることができる。特に、将来学芸員を目指す学生にとっては、博物館展示に必要なスキルを実践で身につけることができる、またとない機会であろう。

学生学芸員制度の利点は、商人館と学生だけにとどまらない。その例として「伊勢春慶」が挙げられる。「伊勢春慶」は、かつて伊勢の一般家庭で使用されていたが、プラスチック製品が一般化したことにより衰退してしまった漆器である。第三回企画展でこの「伊勢春慶」が取り上げられたのがきっかけで、「伊勢春慶」を河崎の特産物として復興させようとする活動が起こった。このように学生学芸員制度は、河崎のまちづくりを盛りたてる点においても、大きな貢献をしたといってもよいだろう。

3)　学生学芸員制度の問題点

河崎の町を多くの人に知ってもらおうと、地域と学生が協力して行っている学生学芸員制度であるが、いくつかの問題点がある。一つは、活動をどのようにして継続していくかという点である。学生の入学・卒業によってその構成員が入れ替わるので、調査データの引継な

どの問題がある。また活動を続けていくには、参加してくれる学生を確保しなければならない。この問題を解決するために、学生学芸員制度を大学の履修単位として認定するという提案も過去にはあったが、参加する学生の意欲低下の懸念や単位の可・否の基準設定が困難であるという点などから、現在のところ制度の単位化には至っていない。また、学生を指導する専門知識を持った人材が少ないため、指揮が効率よく行き渡らず、学生の意欲を完全に活かしていないことも大きな問題である。他にも、展示の準備には労力が必要なため、必然的に一つの企画展が長期化してしまうことが、貴重な資料を傷める原因となるのも解決しなければならない点である。

4)　まとめ

前項で見たように、現状のところ学生学芸員制度には、解決すべき問題点が多数存在するが、独自の街並みや文化を活かしたまちづくりを目指す地域と、授業で得た知識を実際に活用し、経験を積む機会が与えられる学生双方のメリットが含まれている点で、非常に合理的な活動であるだろう。今回調査に協力していただいた学芸員の石川さんは、「現在は歴史を専門とする皇學館大学の学生で構成されているが、河崎や活動の内容に興味を持った全国の学生が参加できるような制度にしていきたい」とおっしゃっていた。他大学の学生が集まり、構成員の専門のジャンルが広がれば、展示内容もより豊かになると期待される。そして何より、「河崎をより多くの人に知ってもらいたい」という、地域の人々や学生学芸員たち共通の目的を達成する一つの方法になるだろう。地域と大学が新たな関係で結ばれた学生学芸員制度は、今後のまちづくりや教育の在り方に大きな影響を及ぼすかもしれない。

なお、本稿を作成するにあたって、多大なご協力を頂いた現地の方々に、この場をかりて厚く御礼申し上げたい。

【参考文献】

・石川達也（2008）：「伊勢河崎商人館の取り組み―現状と課題― 」,『歴史学と博物館』第 4 号，pp. 7-13.

# Ⅴ．河崎の特産物

石貫 裕子・杉本 順也・西岡 美樹

１．はじめに
２．伊勢春慶
　1）春慶の復興
　　(a) 復興に関するイベント
　　(b)「伊勢春慶の会」
　　(c) 復興できた背景
　2）現在の春慶
　　(a) オーソドックス春慶
　　(b) カジュアル春慶
　3）春慶を使用している人の話
　　(a)「遊行」古野さん
　　(b)「角屋」の会長・田中さん
　　(c)「大喜」坂田さん
　4）春慶の抱える課題
　　(a) 塗師の育成
　　(b) 商品の開発
　　(c) 使用してもらう店舗の拡大
　5）中村さんの考える春慶
　6）塗師・森さん
３．Ｓサイダー
　1）Ｓサイダーとは
　　(a) Ｓサイダーとは
　　(b) マークの由来
　2）Ｓサイダーの歴史
　　(a) Ｓサイダーの発展
　　(b) Ｓサイダーの衰退
　3）Ｓサイダーの復興
　　(a) きっかけ
　　(b) 復興における苦労
　4）Ｓサイダーの今後
４．まとめ

## １．はじめに

河崎には、明治時代には業者が乱立するほどの需要があった伊勢春慶や、九州・台湾にまで販路を広げていた S サイダーなどの特産品があった。しかし、これらは太平洋戦争や高度経済成長などの時代の流れと共に衰退していった。それが近年河崎のまちづくりの一環として注目され、復興されるに至った。

そこで私たちは、インタビュー調査などをもとにして、一度は生産量が希少になった伊勢春慶・生産が途絶えてしまった S サイダーが、どのように復興・再生されてきたのかを調べ、特産品がその地域でどのような役割を果たし、期待されているのかを明らかにしていく。また、現状における復興・再生の課題を明らかにすることで、今後の河崎の特産品の展望についても考察していきたい。

伊勢春慶に関しては、伊勢春慶の概要や歴史は前年度の報告書に記載されているので、今回は省略した。

## ２．伊勢春慶

一度衰退し、地元の努力で復興させた河崎の特産品である伊勢春慶について調査した。春慶の製造拠点である伊勢春慶デザイン工房の中村さんや、塗師の森さん、実際に伊勢春慶を使用しているお店などに話を聞いた。

### １）伊勢春慶の復興

（a）イベント

2004 年　里帰り伊勢春慶展開催。伊勢市内から多く見に来た。商人館を拠点とし、一度全国に散っていった伊勢春慶を里帰りさせようとした。年配者には懐かしく、若年層は使ってみたいと、なかなかの反響。さらに本格的に春慶を復興させるべく「伊勢春慶の会」が発足。メンバーは 20 名、年齢、職業は様々である。

2005 年　「伊勢春慶と常滑焼のジョイント展」開催（5 月　河崎商人館・角吾座）

2006 年　商人蔵にて伊勢春慶を販売開始

2008 年　伊勢春慶デザイン工房完成。この時も展示会を行う。カジュアル春慶もここで一部製作し販売している。
夏に全国うるしの会が伊勢で開催。知らない人が多かったが、全国的な認知を得る。

（ｂ）伊勢春慶の会

商家の蔵や町家を活かしたまちづくりが進む中で、河崎でまちづくりを進める人、伊勢春慶を今も大切に使っている人、かつて伊勢春慶を作った経験のある指物師や塗師、漆器の持つうるおいや温もりに興味を覚える人などが集まり、平成 16 年１月、伊勢河崎商人館で「里帰り伊勢春慶展」を開催した。

皇學館大学の学生や大学院生たちが伊勢春慶の歴史・民俗学的な調査研究を行い、豊富な実物資料や写真などとともに展示した。また、現代の生活に伊勢春慶を活かすアイデアを提

案し、職人の実演などさまざまな催しも行ったところ、若い人たちを含む来場者から大きな反響を得た。

そこで、伊勢春慶を本格的に復活・再生しようと同展の実行委員会が母体となり、平成16年５月に「伊勢春慶の会」を設立した。

●主な目的

かつて栄えた漆器「伊勢春慶」の復興を行い、新たな産業と雇用を創出し、伊勢地域の活性化につなげる。

●主な事業

〇新商品事業

オーソドックス春慶

伝統的な物を中心にした春慶の再生

カジュアル春慶

伝統の良さを継承し、顧客視点に立った現代性を持ったデザイン性のある製品

〇特注対応事業‥‥オーダー製品の製作

〇再生事業‥‥古い春慶の修復（塗り直し）

〇保存事業‥‥古い伊勢春慶の保存と販売

〇伊勢春慶の技術の継承と育成

〇伊勢春慶の調査と研究

〇情報の発信

（伊勢春慶の会　HP より引用）

（c）復興できた理由

商人館ができたことで、地元の魅力を再発見することができ、行政が補助金を出してくれるなどのバックアップをしてくれたおかげで製造拠点となるデザイン工房をつくることができた。また、古くから木工品の製造が盛んだったため、木材を扱う技術があり、市立工芸指導所で漆塗りの技術を保存・継承していたことが重要である。さらに、何かイベントをやる度にマスコミが取り上げてくれて、伊勢春慶を知る人が次第に増えていったことがあげられる。

２）現在の伊勢春慶

（a）オーソドックス春慶

オーソドックス春慶とは、昔ながらの春慶のことである。昔からあるデザインは、暮らしの中で使われ、選ばれてきた、シンプルな形の春慶である。二段重箱やほんの少しだけ立ち上がる縁をつけた平膳、長方形の筆箱などがある。

写真１　オーソドックス春慶
（2009 年 8 月 8 日
伊勢春慶デザイン工房にて撮影）

（ｂ）カジュアル春慶

現代の生活と調和したデザインの春慶である。和柄の布とデニムを配して持ち手を伊勢春慶にした手提げバッグ・キューブ型のカードたて・携帯ストラップ・CD ラックなどがある。京都芸術大学がデザインしたものもあり、一部を商品化している。
今後も種類を増やしていく予定で、デザインや使いやすさに留意してテーブル・はしなどを構想中である。

写真２　カジュアル春慶(1)

写真３　カジュアル春慶(2)

（写真２・３　2009 年 8 月 8 日　伊勢春慶デザイン工房にて撮影）

（ｃ）オーソドック春慶とカジュアル春慶

オーソドックス春慶には伝統を継承している素晴らしさがあり、カジュアル春慶には現代に合った素晴らしさがある。「両者が共にあることに、伊勢春慶の意味がある」と商人館の方は言っている。

３）伊勢春慶を使用している・使用していた人の話

(a)「遊行」古野さん

手打ち石臼挽そば店、「遊行」の古野さんによると、「商人館の人と知り合いだったので、約 3 年前の開店時から使用していた。丁寧に扱わないといけないので、はっきり言って使

写真４　「遊行」のそば
平盆・そばの器・箸が伊勢春慶である
（2009 年 8 月 9 日　「遊行」にて撮影）

い心地は良くない。しかし、その分伊勢春慶の味が出ていて良いものである」という。

（b）「角屋」の会長、鈴木さん

二軒茶屋餅を販売する角屋会長のお話によると、木地のままだと醤油などが染み込むので、現在で言う身近なニスやペンキのようなものを塗った容器として伊勢春慶を使っていたという。しかし、「漆は熱に弱く、時代の流れでより良いものが開発されていくので、現在は使用していない。伊勢春慶は趣があってよいが、時代離れしているから、普及は難しいのではないか」とのことである。

（c）「大喜」坂田さん

宮内庁御用達の料亭、大喜の坂田さんによると、伊勢市で漆の会の全国大会が行われた。そのときに伊勢春慶を広めようということで、お昼ご飯の容器に伊勢春慶を使用し、デビューさせたという。

大喜では、2009 年 9 月頃から月替わりのお弁当に使用している。「伊勢春慶の容器の中に皿を入れないと盛り付けにくいが、特に問題はない。プラスチックのほうが安いし、漆器で言えば輪島塗もあるが、地場産品のものを使おうということで使用している」とのことである。弁当箱の蓋には、「大喜」の文字が記されている。

写真 5　「大喜」で使用されている春慶

写真 6　春慶を用いたメニュー

（写真 5・6　2009 年 8 月 9 日　「大喜」にて撮影）

4)　春慶の抱える課題

伊勢春慶の会では、伊勢春慶の課題として以下の 3 点を挙げている。

(a) 塗師の育成

現在は、2 人しか塗師がいない。その 2 人も 70 代と高齢なので、後継者の育成が必要である。そこで、その 2 人の塗師が指導者となって、2009 年 10 月 3 日から伊勢春慶のデザイン工房にて、塗師の養成講座が毎週土曜日に開催されるようになった。30 歳代から 70 歳代まで幅広い年代が参加している。

(b)　商品の開発

現在、デザイン工房ではオーソドックス春慶、カジュアル春慶のふたつを作っている。しかし、まだ商品の種類は決して多いとはいえない。京都芸術大学がデザインを手掛けたカジュアル春慶の商品化の構想があるが、それでも更なる商品の開発が求められる。

(c)　使用してもらう店舗の拡大

現在、伊勢春慶に出会える店として、上記の「遊行」や、「大喜」など 5 軒ある。しかし、使用してもらう店舗（取引先）をより拡大することで伊勢春慶を再び”産業として”復興させることができる。仕事が増えると、塗師の後継者の育成も行いやすい。

５）伊勢春慶の会・中村さんが考える春慶

伊勢春慶の会のメンバーである中村さん(男性)に、伊勢春慶はどのようなものであると考えるかを聞いてみた。

伊勢春慶は日常で使う物であるので、庶民的な感じがして親しみがあり、全てが手作りなので、あたたかみがあるように思うそうだ。木地を活かす伊勢春慶は、伊勢でよく見られる生なり文化で、「伊勢」の全てが凝縮されていると考えているようである。また、「河崎は問屋のまちというイメージがあるが、春慶は河崎をものづくりのまちとしても発展させ得るものであると考えている。2013 年に伊勢神宮の遷宮があり、伊勢が注目されるので、それを目標に春慶を広めていきたい」ということだった。

６）漆職人・森さん

ここでは、デザイン工房で塗師をしている森さん(70 代・男性)の話を紹介する。

森さんは、塗師の家系に生まれ、幼少の頃から父の姿を見て育ち、そのあとを継いだ。伊勢春慶が復活した当初は、昔からある春慶の塗りなおしが多かった。その後 2007(平成 18)年頃から新しく塗る仕事が増えてきた。そしてその頃に仕事場を家から工芸の場に移した。現在は生地は河崎の外で作っているが、生地を作る人も育て、河崎で全てをつくれるようになりたいとの思いを抱いている。

3. Sサイダー

1）S サイダーとは

（a）S サイダーとは

「S サイダー」とは、伊勢・河崎の老舗酒問屋「小川酒店」が明治 42 年～昭和 50 年代にかけて製造していたサイダーである。まずは、「小川酒店」について説明する。「小川酒店」とは、江戸時代から現代まで卸業を営んでいた河崎を代表する酒問屋である。「小川酒店」は江戸時代の初めに酒などを扱う問屋として商いをはじめ、明治期には酒・醤油・清涼飲料を中心として、灘の銘酒「白鹿」の東海地方の総代理店となるなど、大きく発展した。明治 24 年、小川酒店の当主・8 代目小川三左衛門（さんざえもん）が当時流行していたラムネの製造に着手し、9 代目三左衛門のときにサイダーを手がけ、以後、酒問屋とラムネ・サイダーの製造販売を兼ねていた。

（b）マークの意味

S サイダーを見て、まず目を引くのが「S」と「X(エックス)」を重ねたマークである。このマークの「S」はサイダーの製造を手がけた 9 代目当主小川三左衛門のイニシャルから、また「X」は小川家の家紋「違い鷹の羽」に由来している。このマークは出荷用の木箱や、贈答用のパッケージ、栓抜きや紙コップなどのノベルティにもあしらわれており、「小川酒店」の商品であることを示すロゴの役割を果たしていたと考えられる。

写真 7　復刻版 S サイダー
（「角屋」HP より引用）

写真 8　S サイダーのノベルティ
左：紙コップ　右：栓抜き
（2009 年 8 月 9 日　伊勢河崎商人館にて撮

2）S サイダーの歴史

S サイダーの歴史について述べる前に、まず国内の清涼飲料水の歴史を簡潔に示しておきたい。全国清涼飲料工業会によると、幕末、ペリーが浦賀へ来航した時に飲料水の一部として船にレモネード（後のラムネ）を積んでいたのが始まりとされている。長崎でラムネの製造が始まり、明治 10 年代になると、横浜・神戸などでもラムネが製造されるようになった。明治 19 年、コレラ大流行の際に「ラムネを飲むとコレラにかからない」という新聞の報道によって、ラムネブームがおこる。この背景には上水道が未発達であったため、人々が安全

な飲料水を求めていたことが考えられる。また、明治 37 年、横浜で「金線サイダー」が発売された。以来、王冠栓のものをサイダー、玉栓のものをラムネと呼ぶようになり、サイダーは高級品として人気が出た。

「小川酒店」はこのような流行を察知して、ラムネやサイダーの製造・販売に乗り出したものと考えられる。明治 42 年にエスサイダーの製造を開始、翌年には三重県各地に特約店をつくり、その後、近畿から四国、さらには九州や台湾にまで販路を広げた。また、三ツ矢サイダーとともに鉄道院西部管理局(現在の JR)の指定品として、駅でも販売され、1922 年に行われた平和記念東京博覧会にも出品されるなど、エスサイダーのブランドは確固たる地位を築いた。また、お中元や贈答品として広く使われていたことが、当時の広告からわかる。

太平洋戦争によって一時製造を休止したものの、戦後も旅館やホテルなどでの販売で根強い人気を誇っていたが、昭和 50 年代に製造を中止した。この背景には様々な要因が絡み合っていると考えられる。まず、「コカコーラ」やアサヒの「バヤリース」など、戦後に様々な清涼飲料が販売されたことが考えられる。次に地下水の問題がある。かつて河崎の地下には、宮川水流が全域に走っており、5 ～ 6m ほど掘ればきれいな水が出てきた。しかし昭和 30 年ごろ、工場の乱立によって地下水の取り合いとなった結果、きれいな水をすぐに手に入れることが難しくなったという。また、河崎のまち自体が衰退していったことも考慮に入れなければならない。このようにして、エスサイダーは河崎のまちから姿を消してしまった。

3）S サイダーの復興

（a）復興のきっかけ

エスサイダーを製造していた小川酒店は、2003(平成 14)年に「伊勢河崎商人館」として生まれ変わった。その際に蔵の中を整理していると、販売されていた当時のエスサイダーが未開封のまま発見された。これをきっかけにエスサイダーについて調べていくうちに、エスサイダーの魅力・すばらしさが分かってきた。かつての地域資源を現在によみがえらせる必要があると考え、エスサイダーの復刻に乗り出した。

（b）復興における苦労

しかし、エスサイダーを復興させようにも、当時の帳面も製造方法も分からず、途方にくれたという。そこで、かつて伊勢地方で作られていた「神都ビール」を復刻・製造している(株)KADOYA に製造を依頼した。企画者(商人館)と製造者(KADOYA)の考えを一致させるため、当時の味やエスサイダーの歴史について話し合いが行われた。

また、エスサイダーはもともと小川酒店で製造・販売されていたものなので、商人館の名義で販売してもよいか許可をもらいにいった。エスサイダー復興の旨を話すと、小川酒店側も「自分たちの作っていたサイダーがまた飲めて嬉しい。」と承認、2008(平成 19)年 11 月 23 日に販売開始となった。ここにエスサイダーは、再び河崎の地で製造・販売されることになったのである。

4）S サイダーの今後

現在、エスサイダーは、商人館はもちろん伊勢近辺のホテルやコンビニエンスストアでも販売されている。この夏(2009 年 8 月時点)は観光客の認知度も上がってきており、来客との話のきっかけになる、という。商人館としては、エスサイダーに新たな地域資源としての役割を期待している。そして河崎の町に来てもらい、実際にサイダーを飲んでもらう。このようにエスサイダーを通して河崎の町を体験し、思い出を作ってもらいたい、と考えている。また、今後の課題として認知度の向上を挙げていた。そのためにメディアを通してより多くの人にエスサイダーを知ってもらいたいので、マスコミの取材は積極的に受けるつもりだ、と話していた。

4. まとめ

栄えていた当時の伊勢春慶は、日常生活で利用するものとして漆器の需要が高まり、伊勢春慶の生産がはじまった。また、S サイダーは当時の流行を察知し、販売を開始した。これらのことから分かるように、両者ともに自然発生的なものである。

しかし、現代の伊勢春慶や S サイダーの位置づけは、河崎でしか作れない特産物を目指し、意図的につくられたものである。その背景は、特産品を河崎のまちづくりに活かそうとしていることが考えられる。伊勢春慶は実物を見て春慶の良さを知ることができると考えられ、S サイダーの場合、実際に河崎に来て飲むことに意味があり、河崎を体験することが出来ると考えられている。

伊勢春慶・S サイダーの両者とも、復興には多くの人々の協力が必要であった。さらに、再び生産を増やす・開始するだけではなく、その後販売、使用しないことには、復興することは出来ない。特に河崎の人々の協力が必要不可欠であったと言えるだろう。

また、伊勢河崎商人館や、伊勢春慶デザイン工房といった「場所」の存在はイベントを開催するなどの拠点となり、復興に大きく貢献したと思われる。

今後、伊勢春慶や S サイダーが広く知れ渡り、それを目当てに多くの人が河崎に訪れ、河崎の良さを知っていってくれたら嬉しく思う。これから、伊勢春慶・S サイダーが、よりまちづくりに活かされることを願っている。

【参考文献】

・伊勢文化舎(2003)「伊勢春慶　ふるさとの漆器・再生への物語」『伊勢人』第 136 号 pp.6 ～ 39
・NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆(2009)『エスサイダー The story of Cider』伊勢文化舎
・伊勢角屋麦酒　【復刻】S サイダー
http://www.life-39.com/isemile-food/biyagura/s-soda.htm　2010/02/10 最終閲覧
・伊勢志摩経済新聞　『河崎に「伊勢春慶デザイン工房」－築 110 年の古民家を改修』
2008 年 3 月 24 日付　http://iseshima.keizai.biz/headline/406/　　2009/07/22 最終閲覧
・伊勢春慶の会　ショップブログ
http://blog.sakatoku.shop-pro.jp/?month=200909　2010/02/17　最終閲覧
・伊勢春慶の会　HP　http://www.ise-shunkei.com/people.html　2010/02/10 最終閲覧
・社団法人・全国清涼飲料工業会「清涼飲料の歴史」
http://www.j-sda.or.jp/kids/data/pdf/rekishi.pdf　2010/01/27 最終閲覧

# ＜ 編 集 後 記 ＞

○初めてのインタビュー調査で、会話をしながら聞きたい事を聞くという難しさ、聞いた話を上手くまとめる難しさを知ることが出来ました。また、現地調査を終え、編集していると新たに疑問が湧いてきて質問項目の立て方に考えの甘さが見られました。この実習で一番実感したことは、調査する際には「勇気」と「体力」が必要だということです。直接インタビューすること、電話をかけることはとても緊張しましたが、自分が知りたいことは、動くことで、手に入れられるということが分かりました。この実習で得たものを、今後に活かしていきたいと思います。私たちの調査に快く協力していただいた河崎の方々、的確なアドバイスをしていただいた大場先生、一緒に調査、編集してくれた同じグループの 2 人に感謝しています。（石貫　裕子）

○行く前はどうなるのだろうと不安が多かったのですが、いざ向こうに行ってみるとそれほど不安がることでもないということがわかりました。しかし一方で、インタビューをする際、こちらが予想していた答えを返してくれるわけではないということを知り、インタビューの難しさや奥深さを知りました。レポートでは多くの情報をいかに整理し、わかりやすくしていくかが実に難しく、また時間のかかることかがわかりました。この活動を糧にして、さらに自分の研究を深めていきたいと感じました。（阪口 巧也）

○現地に赴き、インタビューをするという経験は今回が初めてであり、不安な点も多かったですが上手くできたと思います。今回得た経験を今後の卒論などに活かしたいです。改めて、お忙しいところ今回の調査にご協力いただいた河崎の皆さまに深く感謝します。（坂中 里名）

○初めての野外実習ということもあり、最初は戸惑ってばかりでした。中でも一番苦労したことはインタビューでした。文献を読むことや、インターネットを使って調べることとは違い、コミュニケーションが必要なので、質問の内容がうまく伝わらず、時間がかかってしまいました。しかし、得られるものは予想以上に多く、とても良い経験になりました。（杉本　順也）

○今回の現地調査で、実際に伊勢河崎を見てみると、話に聞いてはいたが、昔の資料などからはかなり離れた姿となっていた。しかし、現在の街並みから、昔の姿を偲ぶことが出来たということは、まだ街並みは保存されているほうで、河崎の方々の町に対する誇りのようなものを感じることが出来た。その傾向は、本河崎のほうが強く、向河崎は空き家になっているものも多く、荒れている感じがあった。そのためか、向河崎での聞き取り調査が十分とは言えず、比較するための資料に偏りがあったことは、反省点として挙げられる。初めてのフィールドワークということもあり、勝手がわからず、難しく感じた部分もあったが、この経験を今後に活かしていきたいと思う。（出水　束）

○今回の調査を通して、このような調査には度胸が必要だと痛感しました。初めてお会いする方にインタビューを行う、ということでとても緊張しましたが、いざ開始すると、どの方も親切に、かつ分かりやすく答えて下さったので、安心してインタビューを行うことができました。また、インタビューの内容をまとめる作業において、いかにわかりやすくまとめるか、そのためにどのような情報を載せたらよいのか、ということに苦心しました。苦労した分、非常にやりがいがあったので、この経験を次に生かしたいと思います。今回の調査では河崎商人館の方をはじめとする河崎の方々には大変お世話になりました。河崎の街並みや、伊勢春慶、Sサイダーなどにも魅力はありますが、なによりも河崎に住む人々のあたたかさ、優しさがこの町の最大の魅力だな、と感じました。調査へのご協力、本当にありがとうございました。（西岡　美樹）

○インタビューの際、会話の中から必要な情報を引き出すことは初めての経験で、あまりうまくいかなかった。また、多くの情報の中からどれを選んでまとめるか、という判断が難しかったように思う。文献の情報はそうした取捨選択を経てまとめられたものだということを改めて実感した。（本多 あずさ）

○泊まり込みの調査をするというのは初めての経験で、慣れないことも多く戸惑いの連続でした。そういう意味でも今回の調査がグループワークだったことは僕にとってかなり心の支えとなりました。一連の調査を経て、今まで描いていた観光という言葉へのイメージが一変し、その多義性を学ぶことができたのが今回の調査での収穫であったと思います。（山田 耕）

○現地調査で始めて河崎を訪れてみて単純に、建築物などに赴きがあっていい雰囲気の場所だと感じた。また、現地の人々がその街並みを保存していこうと努力している姿にも共感する部分がおおいにあった。レポート作成の段階においては、現地での向河崎の調査が不十分であったため、情報量的に少ないところがあり、そこが反省点である。写真やデータなども既存のものに頼る箇所が多かったのも加えて反省点に挙げておく。（山本 達也）

○インタビュー形式の調査を行うのは今回が初めてだったので、戸惑った部分もありましたが、一応形にはなっていた「はず」なのでよかったと思います。インタビューに関しては、一見脱線しているような話の中にも意外と重要な情報が含まれていることがあるなど、一筋縄ではいかないなと思いました。レポートの執筆段階になると、今度は情報をまとめることの難しさを感じました。こうした経験も含めて、今後の研究活動に活かしていこうと思います。（若井 裕）

○私が今回難しいと感じた点は、インタビューの際に、必要な情報のみ書き取ればいいと考えて臨んだため、結局まともにノートが取れなかったということである。できるだけ多くのことをノートに取ることで、すぐに見返すことができ、不明な点をもっと深く質問できたのではないかと感じる。今回初めて聞き取り調査を行ったということで、この経験を卒業論文などの際の調査に生かせればと思う。（和田 崇宏）

**伊勢 河崎**

－2009 年度 地理学野外調査実習 報告書－

発行日　2010 年 3 月 26 日
編　集　大場 茂明（大阪市立大学大学院 文学研究科 教授）
大阪市立大学文学部 地理学教室
〒 558-8585　大阪市住吉区杉本 3-3-138
TEL 06-6605-2402 / FAX 06-6605-2357
E-mail oba@lit.osaka-cu.ac.jp